

説教 『当事者として、耕し、守る』 山本 護 牧師
聖書 創世記 2:19~20/ルカによる福音書 17:20~21

神の国はいつ来るかという問いに、イエスは「神の国は見える形では来ない。[ここにある][あそこにある]と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ(ルカ 17:20~21)」と答えた。「実に=見よ」や、「間に=ただ中に」という言葉には微妙なニュアンスがあつて、私なら「ほら、君たちの内にあるじゃないか」と訳す。この箇所をじっと見つめていると、イエスの語り口調が感じられる。まず印象的なのは、「来ない」「言えるものでもない」と重ねられた否定の強い調子だ。

ファリサイ人の問い(17:20)には底意があるし、傍観者のつもりでいる。それに対してイエスは、「神の国は、世に言われるように、いつかやって来る事柄ではなく、また傍観者のものではない」と厳しく否定した。その直後、幾分につこりし、「神の国だったら、ほら、君たちの内にあるじゃないか」と柔らかく示した。そして弟子たちの方に向き直り、聖書と比喻を用いて諄々と教えた(17:22~35)。イエスの変化する口調は語意に納まりきらない。想像力を働かせ、その言葉の膨らみをも捉えたい。

神の国は「そのうち来るだろう」と、安気に、傍観者のように待つものではない。「ただ中に」ある当事者として、「今」ここで神の国を生きる。イエスは共に十字架にある者に「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる(23:42)」と告げた。「今日、今」私たちは、十字架のキリストと共に神の国に在る。言い換えれば、私たちは既に、己が十字架を負って解き放たれている(マ 6:6)。

「神の国なら、ほら見てごらん。君たちの内にあるじゃないか(ルカ 17:21)」。当事者である私たちは、今、ここを神の国とする。「神は御自分にかたどって人を創造された(創世 1:27)」。「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた(2:15)」。「耕し=開発」、「守る=保全」とは逆の行為ではないのか。神にかたどられた者として、私たちは何を耕し、何を守るのか。

手つかずの原生林はともかく、放置された里山や野原はひどく不調和な感じがする。草刈り機をふり回した数日後、強い夏草に抑え込まれていた種類数多の芽が出ている。なんと美しい調和か。これこそ人間が生きていく環境であろう。田畑は食物工場ではない。お百姓は畑の隅に花なぞを植え、無意識に調和を整えている。耕し守り、守り耕す。イエスは言うだろう。「ほら、これが神の国だよ」と。

神の国にあつて私たちは「耕し、守る(2:15)」。山野が荒れ果てぬように、耕す。耕すことができるように、山野を守る。核兵器や原発は、守ることを疎かにして「耕し過ぎた」産物。放射能減少に要する数十万年は、人間が責任を負える時間ではない。福島原発の周辺は、もう耕すことができない。耕せないから、守ることができない。その逆も然り。私たちは神の国の一面を台無しにしてしまった。

「人が呼ぶと、それはすべて生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けた(2:19b~20)」。育てようと、食べようと、人はこれらに名を付け、共に生かされていることを空腹の身体によって深く知る。これらは神が御用意くださる神の命(2:19a)。私たちはこの命に与る当事者なのだ。飽食は命なき傍観者を生じさせる。原発も、安保法制も、私たち当事者の問題である。



【おまけのひとこと】

情報を集積しても 神の国は像を結ぶまい 教えられても 神の国の手応えはあるまい その国は
通りかかった鰻屋の店先で 己が腹の讃美を聴くような 心身で受け取る神の秩序なのだから